

成分の異なるものを同一種にして居る悩みがある。今回沢山の標本を取扱て居る際形体が従来の *rubescens* で而もスチクチン酸を含む標本が相当に出現したので之を *Usnea pseudorubescens* と云う名で呼ぶことにした。同時に形体が *Us. rubicunda* でノルスチクチン酸とサラチン酸を含むものにつきては *Us. rubicunda* の鬚枝多きものと *Us. rubescens* var. *rubrotincta* の区別が困難であるので目下懸案中である。

■井上浩：コケの写真解説と栽培。pp. 166, 写真版 198 (内、原色版 23), 挿図 32, 1964 加島書店, ¥ 450. 本書は前に同著者によって出された「コケ類 — 研究と採集・培養」の姉妹篇ともいべきもので、前著が主としてコケ類についての、通論的な解説であったのに対して、本書はそのまえがきにもあるように、コケ類の種類の見わけ方、つまり個々の種を対象としての各論的な解説と、コケを庭作りに利用してみようとする人に対する注意などがのべられている。種類としては約 180 種位がとり扱はれている。最近コケを研究したり栽培したりしてみようという人が、全国的にふえているが、そういう人のために書かれた和文の参考書というのが非常に少い。本書が出るに至った動機もそこにあるわけで、したがって採録してある種類もごく普通にみられ、かつ大型で、すこしなれば肉眼でも大体見当のつく種類がえらんであるので、これからコケの研究をはじめようとする人にとっては大へん便利な参考書である。種類毎にその全形又は群落が、198 葉の写真で示されているので、いわばコケの写真集といった特ちょうもそなえていて、それだけに線がきによる従来のコケのスケッチ図に比べて、肉眼でみたときのコケの感じはよく出ている。たゞ写真による表現にはどうしても限界があって、デリケートな点は出ないので、この写真と見くらべることによって、いきなり実物を鑑定してみようとしても、ちょっと無理ではないかと思はれる。専門家による鑑定を受けながら、一方において本書でそれを再吟味してゆくところに、本書の価値が発揮されるのではないかと思う。コケの生態写真が、原色版をまじえて多数出ているので、種類鑑定に興味のない人にもコケのもつ美しさを味わってもらうのには役立つし、コケ専門の人にとっても楽しい写真である。たゞ写真の植物名が、写真に添えてなくて、別の本文の所にのみあるので、照合するのに手間がかかる。写真のところにも種名が添えてあれば、覚えるのに一そう便利ではなかったかと思う。何れにしても類書のほとんどない今日、大へん役に立つ出版である。 (高木興雄)

■Maheshwari, P. and Vimla Vasil; *Gnetum*. pp. 142. Botanical Monograph No. 1. Published by Council of Scientific & Industrial Research, New Delhi (1961). Rs 20.00. *Gnetum* に関する今までの研究の総まとめをしたもので、各種類の分布、栄養器官と生殖器官の解剖学的解析がのべられ、近縁群との関係が考察され、とくに化石植物の *Bennettites* と多くの点で類似が認められるとしている。 (山崎 敬)